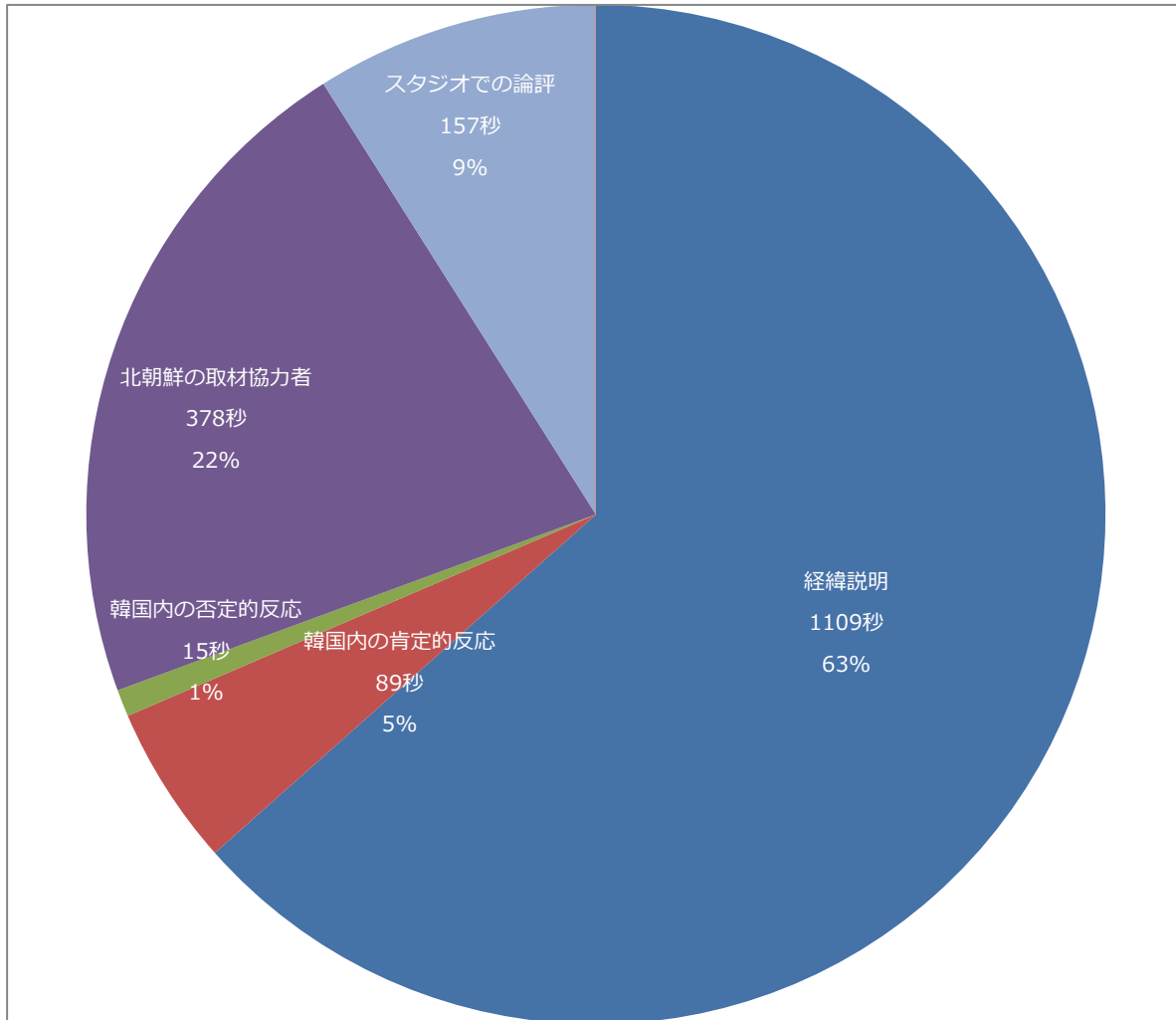


TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名： 報道特集	放送日： 2018 年 4 月 28 日
出演者： 日下部正樹、膳場貴子、金平茂紀、日比麻音子		
検証テーマ： 財務省文書改ざん、メーデー中央大会、【特集】 南北首脳会談、【特集】 憲法改正		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 南北首脳会談 ・ ゴールデンウィーク ・ 浅草寺泣き相撲で小池知事が土俵に ・ ダンプカー横転 ・ 財務省文書改ざんで謝罪 ・ エンゼルス大谷 ・ 暴走バイクとパトカーが衝突 ・ 世界最大級の映画の都がオープン ・ メーデー中央大会 ・ 詐欺集団から 3000 人分の名簿 ・ ドローン使い震災訓練 ・ 【特集】 南北首脳会談 ・ 【特集】 憲法改正 ・ スポーツ情報 		
<p>放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <p>・ 財務省文書改ざん： 結論→問題なし</p> <p>麻生副総理兼財務大臣は福岡市内で講演し財務省の決裁文書の改ざんなど一連の行政をめぐる問題について謝罪し原因究明と再発防止にあたりと述べ、引き続き安倍政権を安定した政権として運営していくために、この問題の原因究明と再発防止に当たる決意だと強調したこと、他方で、昨日財務省は福田前事務次官について女性記者へのセクハラ行為があったと判断し謝罪したが、今日麻生大臣からセクハラ問題に関する謝罪や言及はなかったとのことが併せて伝えられた。また、麻生大臣の「行政文書に対する信頼を失ったということは、極めてい遺憾なことであって、これまでのご心配をかけましたことにお詫びを申し上げると同時に、皆様方のご支援を心からお願いを申し上げる次第です。」という発言が取り上げられていた。</p> <p>このトピックについて当てられた時間は 62 秒で、放送法第四条の見地からは特に問題は見られなかった。</p> <p>・ メーデー中央大会： 結論→問題なし</p> <p>東京の代々木公園では 89 回目となる連合主催のメーデー中央大会が開催され、連合によると 4 万人が参加したこと、今年は政党の代表は招待されなかった一方で、加藤勝信厚生労働大臣と小池百合子東京都知事が招かれたこと、合流し新党となる民進党と希望の党の代表がそれぞれ参加したこと、式典の挨拶で連合の神津里生会長は春闘でのベースアップが広がっていることを評価しながらも、働き方改革法案は過労死をなくす趣旨とは全く異なるものだとして、高収入の一部専門職を労働時間の規制から外す、高度プロフェッショナル制度を削除した過労死ゼロ対策を改めて訴えたことが報じられた。また、神津会長の「何としても過労死、過労自殺ゼロに向かって、私たちが力を合わせていかなければなりません」という発言が取り上げられていた。</p> <p>このトピックについて当てられた時間は 70 秒で、放送法第四条の見地からは特に問題はなかった。</p>		

・【特集】 南北首脳会談：結論→やや問題あり

南北首脳会談について報じられた。経緯の説明が主であり、他には韓国内の肯定的反応や否定的反応、北朝鮮の取材協力者の見解、スタジオでの論評というポイントに分かれた。



経緯説明では南北首脳会談自体やそれに対するアメリカや中国の受け止め方が伝えられた。

北朝鮮の取材協力者の見解では北朝鮮の取材協力者の見解を紹介するシーンとそれに対してアジアプレスの下に朱記した様子が取り上げられていた。

ナレ「大きな転換点を迎えた朝鮮半島情勢。米朝首脳会談に繋がる一連の動きを北朝鮮の住民は、どこまで知っているのだろうか。北朝鮮内部の取材を続けるアジアプレスは、先週、北朝鮮北部に住む取材協力者に電話で話を聞いた。」

記者「南北首脳会談があつてそのあと米朝首脳会談の予定ですが北朝鮮の人達は知っていますか？」

協力者「知らされていない。幹部たちならしってるかな。私もあなたたちが教えてくれたから知っている。北朝鮮はささいなことさえ秘密だから。」

記者「アメリカの大統領についてはどう聞いていますか？」

協力者「なんていう名前だったっけ？」

記者「トランプです。」

協力者「そうだったトランプ。名前だけは分かるけど具体的には知らない。オバマ氏の時と違って『あいつは戦争に狂った狂犬だと』宣伝しているから皆そうなのかなって思ってる。それ以上は分からない。」

ナレ「既に北朝鮮がアメリカに対し非核化に向けて協議する意思を伝えていることについては・・・」

協力者「核を捨てるなんてそんなこと知らせてくれない。『核が無ければアメリカに10回も100回も飲み込まれていた』、『私達も死んでしまう』とっておいて今更それを変えるなんて、それは話しにならない。」

記者「金正恩氏は政権を守るために核を捨てない？」

協力者「死んでも捨てない。私でも捨てない。」

ナレ「アジアプレスの石丸次郎氏はこう解説する。」

石丸「『何で今更必死になって作ってきた核を無くすんだ。』という反発。『信用できない、そんなの嘘だ』という不信。『非核化することで経済制裁が緩むんじゃないか』という期待。その辺が混ざり合った感情を持つ可能性があると思うんですね。下手な説明、下手な情報が北国内に入ると、金正恩さんが圧力に負けたとか、それからアメリカに対して降伏した、中国に対して降伏したんじゃないかみたいなことを国民がそういう受け取り方をすると非常にまずいということがあるから、今凄く神経を使っているんじゃないかなと思いますね。」

ナレ「融和路線に活路を見出す一方で北朝鮮内部では資本主義的な価値感が流入することへの警戒から統制が強まっているという。」

協力者「『非社会主義だ』と言って1から10まで全て取り締まる。路地で商売させないしリアカーの荷物運びまで取り締まる。皆商売で生計を立ててるから核も制裁も関係ない。個人が商売するのだけは統制しないで欲しい。市場では『制裁を受けているのは核のためだ』ということも知らない。情報を遮断しているから。」

ナレ「北朝鮮が積極的な外交攻勢に転じた背景には制裁による経済の悪化があると取材協力者は話す。」

協力者「経済制裁で外貨稼ぎは全て死んだ状態。市場では物が売れなくなった。金正恩政権になっても何も変わらないし率直に言ってもっと酷くなった。今後も良くなるか分からない。一日中電気が一度もぴかっともしないし」

ナレ「中国の貿易統計によると、今年の2月、3月の北朝鮮から中国への輸出額は去年に比べ9割も減っている。」

石丸「これはもう大打撃ですよ。北朝鮮政権としては、体制維持のお金、金正恩さんの統治の資金。輸出産業の石炭や崔産業や衣料製造鉄鉱石はほぼ稼働停止状態。このままいったら枯渇する、干上がってしまうのは間違いないと思えます。「給電地域」がどんどん拡大している。このままいくと、干からびるといのは金正恩政権も十分わかってると思えますから、一刻も早く制裁を解除の方向に持っていかなきゃいけない、そういう非常に強い危機意識というのは背景にあると思えますね。」

ナレ「次に控えるのは、史上初の米朝首脳会談。」

日下部「一番北朝鮮住民にインパクトがあるのが米朝首脳会談だと思う。あそこまで敵だ、敵だといった相手に会って、多分笑いながら会うんでしょう。そういったときに、どうやって国民に説明していくのかなというのは非常に興味がありますよね。」

石丸「非常に大事ですよ。それと対立の時代が終わってその平和の時代に、自分たちが主導して貢献して、この平和が成立しているんだというふうに国内で宣伝したいはずですよ。非常に今、大きな朝鮮半島の歴史上の転換点に来ている。ところが当事者である北朝鮮政権というのは70年間非常に閉鎖的独裁的独善的政治運営をやってきた、変わらなければいけない、どう変わっていくのか。これは金正恩政権にとっても非常に悩ましいことだと思いますね。」

スタジオでの論評では番組冒頭で金平キャスターが「南北朝鮮の両トップが手をつなぎ、徒歩で一緒に分断の象徴である軍事境界線を越えていく光景を見て、歴史とはこんな風にして劇的に動くのかと感慨を抱いた人も多

いのではないのでしょうか。蚊帳の外の日本にいてそう思いました。今日の特集でもお伝えいたします。」とコメントした他、特集の VTR を承けて、以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場「再び日下部さんとつなぎます。歴史的な会談を無事終えた金正恩氏正直今までのイメージと全然違って見えたんですが、日下部さんにはどう見えましたか？」

日下部「北朝鮮のメディアというのはリーダーの良い所しか撮影しないんですね。ですから、今回、金正恩委員長がこちらに来て、西側のメディアに姿をさらすこと、これはかなりの勇気と決断があったんだと思います。それでも正恩委員長、様々な表情を見せていましたね。リーダーとしての 6 年がそれなりに鍛え上げたのかなという印象持ちました。特に一番印象的だったのは、やはりムン・ジェイン大統領と屋外での二人だけの対話です。音声は聞こえないだけに表情が非常に印象的でした。これが素顔なのかとも思いました。それにしても今回、韓国側の発信力演出力際立っていましたよね。板門店という非常に象徴的な場所を舞台にベールに包まれた北朝鮮の指導者を刻一刻と多くのカメラを使って伝える。これは会談を盛り上げる上でも非常に役に立ったんじゃないでしょうか。」

金平「共同宣言には非核化というのが盛り込まれているんですが、具体性がないじゃないかという指摘が出てきていますよね。」

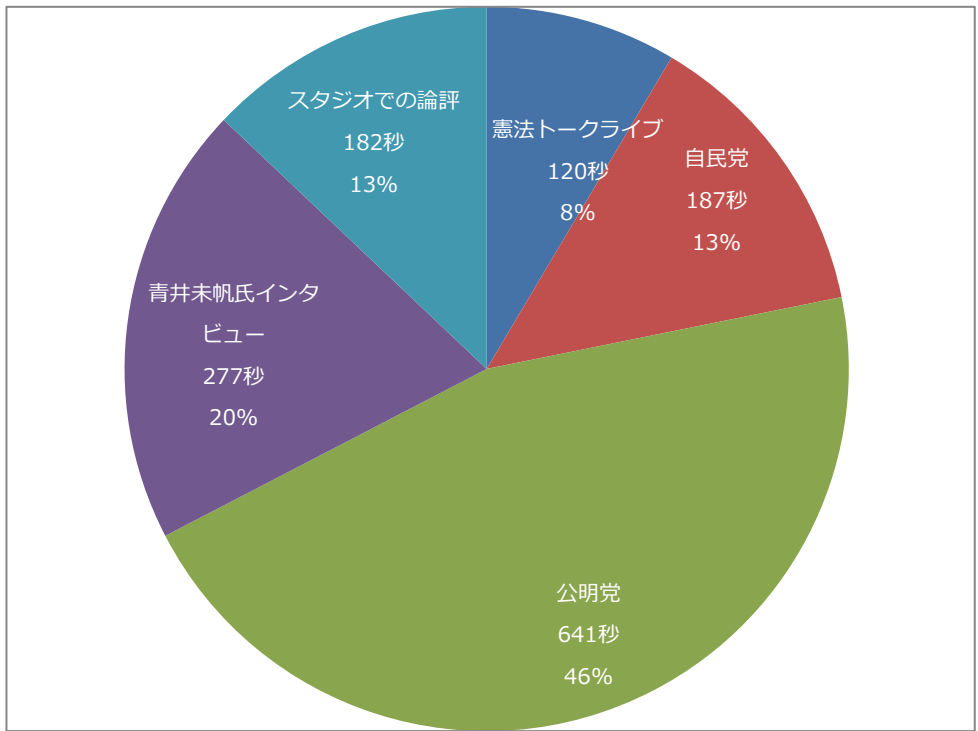
日下部「文在寅大統領は今回の南北会談を米朝首脳会談の前哨戦として捉えて、今できることをやったんじゃないかと、私はそう思いますね。つまり非核化にしても、朝鮮戦争の扱いにしてもアメリカを取り込まないことには実効性がないわけです。過去の 2 回の首脳会談は南北間だけの合意にとどまってしまったわけですね。文在寅大統領、来月中旬にアメリカを訪問します。今後も仲介者として積極的に動いていくんだと思います。あと今回の合意について、非常に疑心暗鬼の声も多いんですけど会談後に二人の指導者が、もう後戻りしない、歴史は繰り返さない、こう明言したこと、これは重要だと思います。」

VTR について今回は北朝鮮の取材協力者の見解を取り上げることで、南北融和が進む中で北朝鮮の人々が取り残されているといった面がクローズアップされていた。他日での特集などを踏まえると、こうした取り上げ方自体は放送法第四条の見地からは問題はないと言える。

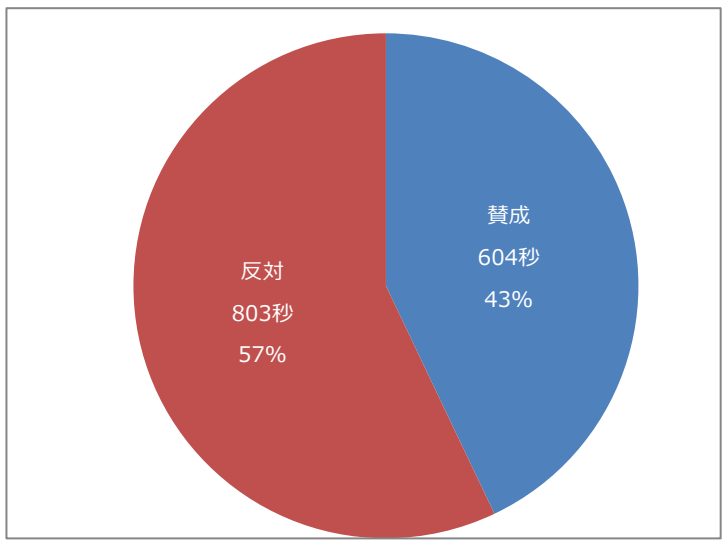
しかし、番組の構成ではオープニングで金平キャスターが「南北朝鮮の両トップが手をつなぎ、徒歩で一緒に分断の象徴である軍事境界線を越えていく光景を見て、歴史とはこんな風にして劇的に動くのかと感慨を抱いた人も多いのではないのでしょうか。蚊帳の外の日本にいてそう思いました。今日の特集でもお伝えいたします。」とコメントするなど特集が始まる前に「日本が蚊帳の外にある」といった予断を視聴者に与えるものであった。実際に「日本が蚊帳の外にある」のかというと、ここには議論の余地があるが、そうした検討をせずに何を持って蚊帳の外というのかも明らかにせずに「蚊帳の外にある」と一方的に断じた上に特集でもどのように「蚊帳の外にあるのか」の説明が欠けているのは、放送法第四条一項二号の「政治的に公平であること」および同四号の「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること。」という点に照らすと問題のあるものと言える。

・【特集】 憲法改正：結論→問題あり

憲法改正についての特集だった。この特集は OSAKA 憲法トークライブ、自民党の議論、公明党および婦人部の議論、学習院大学法科大学院の青井未帆教授へのインタビュー、スタジオでの論評の 5 つのポイントに分かれていた。なお、それぞれのポイントへの時間配分及び比率は以下の通りである。



また、憲法改正に対して賛成の立場およびニュアンスの意見を賛成、反対の立場やニュアンスの意見を反対として集計したところ賛否の比率は以下の通りになった。なお、賛成とも反対とも取れないものは賛否の集計からは外している。



憲法トークライブについては「毎月 15 日大阪で開かれたのは憲法改正の機運を高めることを目的に若者たちを集めたイベント」とナレーションで紹介があり実際に VTR でも会場内の参加者からも憲法改正に賛成する意見多数であったことが確認できたため、このシーンは全て「賛成」として処理した。また、ここでは日本維新の会の馬場伸幸幹事長の「日本の子の最低限のルールを決めている憲法がこれだけ時代が変わってるのに変えないんですか。というのがこの憲法を改正しようじゃないかと言っているが我々の基本的な考え方です。」というコ発言や公明党の石川博崇参議院議員の石川博崇「自衛隊は違憲なのか聞いてみたいという言葉があって、違憲ではありません。日本の国民の生命財産あるいは日本の平和を守るために活動する実力組織は憲法上全く違憲では

「ごいませんというのが私の考え。」という発言が取り上げられていた。

自民党については憲法改正推進本部での議論に焦点が当てられており、金平キャスターが憲法改正推進本部に質問するシーンも取り上げられていた。憲法改正推進本部の議論では本部長の細田博之衆議院議員の「95%です、中学生が読む教科書にです、この自衛隊は憲法違反であるという説があるとか、本来はの憲法の趣旨から離れているようなことをです、教えること自体がです、私はこの憲法 9 条の基本的問題点ではないかと。」という発言が取り上げられていた。また、金平キャスターが質問するシーンでは以下に朱記したやり取りが取り上げられていた。

金平「9 条の改憲論議の前にです、今起きているような深刻な自衛隊の隠蔽体質ですとか、そういうものについてきちんとシビリアンコントロールが機能するようにです、まず働きかけるってのは先決なんじゃないですか。」

中谷元(元防衛大臣、憲法改正推進本部本部長代理)「私にとりましてはあの日報というものはあの部隊が上官に報告してです、でそれを今後活用するための大事な資料なんです。でそれを捨てるとかないということは考えられません。」

金平「考えられないようなことが起きたわけですから、そういう状態をふまえて、今こういう議論を進めていいのか。」

中谷「それはしっかりそれはあのシビリアンコントロールはあの維持しなければ成り立たないわけでありまして、いかなる場合でもこれはやってるかなければなりません。それと憲法問題というのはこれは別の話であって、この憲法上にです、あのしっかりとこの組織を続けるということは、国民がかかることであって、それを判断するのも国民でもあるし、そういうことを早くやっておかないと、しっかりとした国の安全保障の体制が出来ないと。」

ナレ「中谷氏は文民統制の問題と 9 条改正は別だと述べた」

金平「仮に総理が交代した場合もこの案で自民党の憲法改正の方向は行くのか。何故かという憲法に、自衛隊明記ということを入れたいという考えは今の総理の強い意向が働いた結果だということ国民はみんな知ってるからです。」

細田「必要なことはです、いつも提起して、それが議会で議論される。そしてその解釈もしっかり行われるということが正しい憲政であってです、議会主義であり民主主義であると。それをですその時の議席の数や人気の多寡かによってです、動かしてはならないと考えて我々は行っております。」

司会「仮に総理が交代した場合も同じ案かという質問がありましたが？細田先生に対する質問です。」

根本「総理が変わっても同じ案かと、同じ案です。」

細田「そこが問題でしてね。総理が今言われている案でなければ、国民の理解が得られない。それが限界だと思っている。」

この質問のシーンについては金平キャスターの質問は「反対」、これに対する中谷氏や細田氏の回答を「賛成」として処理した。

公明党については以下に朱記したシーンが取り上げられていた。

ナレ「実は憲法への自衛隊の明記を 10 年以上前から議論していた政党がある。2006 年 9 月第一次安倍内閣発足直後に開催された公明党の全国大会。安倍総理も登壇する中、連立を組む公明党は太田昭宏新代表の元自衛隊の存在の明記の検討を盛り込んだ運動方針を決定した。自衛のための必要最小限度の実力組織として自衛隊を保持することを妨げるものではないことを明確にするべきかどうか。公明党は憲法改正について加憲の立場で、基本的人権の尊重、国民主権、平和主義の三原則を堅持。その上で現行憲法への追加による改正を主張している。」

2007年の参院選マニフェストには当面の重要課題の中で、憲法九条について自衛隊の存在を加憲の論議の対象として慎重に検討していると書かれている。さらに2013年参院選2014年衆院選のマニフェストでも同様の表現がなされている。そして去年5月 憲法改正を目指す保守団体日本会議系の美しい日本の憲法をつくる国民の会の大会には公明党の憲法調査会事務局長遠山清彦議員の姿があった。この大会は安倍総理があのだビデオメッセージを寄せたものだ。会の共同代表を務める櫻井よしこ氏は遠山氏にこう質問した。」

櫻井よしこ「公明党の婦人部の方々はすごく熱心な方々ですごく真面目な方々で本当に尊敬すべき方々なんですけれども、今までのね、私の観察ではですね、やっぱり憲法九条に手をつけちゃいけないとかですね、憲法改正反対というご意見が強いような印象を受けるんですけども、ここのところどうやってお足元の方々は、支持者の方々を説得していけるのか、ちょっとお話そこも含めてお話いただければいいかなと思うんですよね。」

遠山清彦(公明党憲法調査会事務局長)「だいぶ踏み込んだ質問で、ありがたいような複雑な気分ですが。」

ナレ「遠山氏は安保法制成立までのエピソードに触れて」

遠山「私は70回以上、全国で回ってこの安保法制を説明して回りました。多くの形がご婦人方でありましたけれども、最終的にはですね、全員とは申し上げませんが、会合の前は賛同してくださる方が2割ぐらいだったのが、1時間程度ご説明して帰り際にはそれが逆転して8割の方々が酸性を頂いたという会場が多かったと思います。しっかりとその決めた時は、説明を自信をもってさせていただきたいと思います。」

ナレ「今年3月に開かれた同じ団体の大会にも公明党の憲法調査会長代理を務める斎藤鉄夫議員が参加した。」

斎藤鉄夫(公明党憲法調査会長代理)「加憲の立場を憲法九条について当てはめれば、現在の一項二項を維持した上で、自衛隊の存在を明記することになるかと思いますが、正直申し上げます。正直申し上げまして党内の議論はその明記をすべきだという意見と、もう今国民の間に自衛隊が違憲だという意見は少ない。あえて書く必要はないのではないかと。こういう二つの意見があることを正直に申し上げまして、いま一生懸命党内で議論をしているところでございます。」

ナレ「9条に自衛隊を明記する案について公明党の支持母体創価学会婦人部の人たちはどうを見ているのか。婦人部は過去に平和憲法を題材にしたマンガ本を出版したこともある。9条改正に懸念を持つ現役の婦人部の会員に話を聞いた。」

日下部「公明党さんは与党な訳ですよ。そういった中でどういう立場で皆さんこの9条についての考え持っていていらっしゃるのかね、率直な意見をまずしたいと思うんですけども。」

60代婦人部「絶対に守ってもらいたいこれだけは。」

60代婦人部「改憲も加憲もいやという立場。戦争に勝っても負けても人の命は奪われる。人が人を殺すことがあってはならない。そこが基本。生命尊厳。憲法9条を守り通すことが最大の抑止力。」

ナレ「憲法についての考えは創価学会の第三代会長、池田大作氏の教えから来ているという。」

50代婦人部「『新・人間革命』の12巻なんですけど、『第9条に込められた戦争の根絶という人類の悲願の実現に』とある。」

ナレ「新人間革命とは池田氏の小説だ。その中にこんな記述がある。『日本国憲法に掲げられた平和の理念と精神を全世界に広げ行くことこそ21世紀に向かって日本が歩むべき方向性である。』」

50代婦人部「ここに仏法者という理念が出ている。私達は根底に仏法というものがある。9条は憲法の中でその理念が非常にあらわされている。『戦争の根絶という人類の悲願の実現』がまさに書かれている。」

ナレ「さらに政治を行う者に対する心構えについての言葉もあるという。」

60代婦人部「『国民は外敵の侵入に対して国を守る気概を持つより以前にまず為政者の野望から身を守る気概を持つ方が大事なようである』と『身の安全を最も明確に規定しているのがこの平和憲法の戦争放棄である』と言

われている。公明党の議員さんは本当に考えてもらいたい。為政者側なんだから。」

ナレ「創価学会婦人部の動向が注目される理由。それは選挙の際選挙区の知人友人等に投票を呼びかけるなど強い集票力もあるためだ。」

60代婦人部「公明党はブレーキ役をやっていると支援者にアピールして安心させる。常にこれからはやっていくんじゃないかと思えます。憲法改正に当たっても、婦人部が大反対しないように落としどころというか。」

日下部「創価学会の中では憲法どうするんですかっていうような議論は出ないんですか？」

婦人部「憲法を変えるなんてさらさら思っていなかった。今ここにきて本当に危機的な状況であるということを確認している。」

婦人部「『改憲ということだけだから大丈夫』第一項、第二項が変わってしまう恐れがあると、知らされていないというのが問題じゃないかなと。それが分かれば皆さんもっと反対するのではないかと思う。」

ナレ「公明党が10年以上前から議論してきた憲法への自衛隊の明記について今どう考えるのか今週火曜山口那津男代表に聞いた。」

山口那津男(公明党代表)「もう10年以上前の話であります。そこも検討すると決めてるわけではなかったと思えます。いろんな意見のある中での一つとして例示をしたに過ぎない。」

ナレ「集団的自衛権の一部行使を容認する法制の成立を経て、公明党は翌2016年の参院選で憲法9条の改正は必要ないと主張している。その上で山口代表は」

山口「自衛隊をどう国民のために活用するかという点については法体系を全面的に整えた、こういう認識でおります。そういう点ではこの10年以上前の議論というのは今乗り越えているとこのように思っております。」

これら公明党を取り上げたシーンについて冒頭のナレーションと櫻井よしこ氏の質問の部分は「賛成」、これに対する遠山議員の回答は憲法改正については答えていないため集計せず、またこれに続くナレーション及び齊藤鉄夫氏の発言も憲法改正について賛否を示しているわけではないので集計しなかった。憲法改正に反対の婦人部について取り上げたシーンは「反対」と処理した。また、山口那津男代表の発言についても改正について必要はないとする意見のため「反対」と処理した。

学習院大学法科大学院の青井未帆教授へのインタビューでは以下に朱記した2つのシーンが取り上げられていた。

【シーン1】

ナレ「9条に自衛隊を書き込むと国のあり方が大きく変わると考える憲法学者がいる。」

青井「まあ(解釈は)1ミリも変わらないとか位置付けるだけであるというような説明がしばしばなされますけれども、問題を小さく見せるという意味において、大きな危険をはらんでいると考えています。」

ナレ「学習院大学の青井未帆教授。私的するのは権力の濫用を防ぐ原理、三権分立の変化だ。」

青井「実力組織が入ると少なくともこれまでのバランスで崩れる理由ですよね。だとするとおそらく特定秘密になるであろう、その自衛隊の運用について国会がどこまで口を出せるのかとか、司法権が何ができるのかとかとか、統治全体に関わってくるような問題ってのが後から後からきつと出てくるんだろうと思います。そう考えると1ミリも変わらないっていうのは全くありえない。理論的にはもうほぼ不可能なお話。」

ナレ「自衛隊そのものの統制に関しては現場でも問題が相次いでいるイラクに派遣された自衛隊の活動の記録。日報は防衛大臣の求めにもかかわらず隠蔽された。さらに幹部自衛官が野党の参議院議員に『お前は国民の敵だ。』と暴言を浴びせたとされる問題も起きた。政治が軍事に優先するという大原則。文民統制が問われる事態は、9条改正の議論とは切り離せないと青井教授は考えている。」

青井「憲法にもう一度はその統帥というような作用を特別なものとしてですね、入れることに他なりませんから、

自衛隊を書き込むということは、あの日報問題とか文民統制とかその辺りから始めなければ、本来はその統帥作用をどうコントロールするのかっていうことは語れないはず。なんとなく自衛隊頑張ってるし入れてあげた方がいいんじゃないかという話ではなくって、その実力組織ですので、これコントロールに失敗した結果が日本国憲法の前提なわけですから、本当にその力量があるのか、任せていいのか、ということも国民に問われているほかならないんじゃないでしょうか。」

【シーン2】

ナレ「憲法9条の改正をめぐっては長きにわたり賛否が鋭く対立してきた。そもそも9条とは何なのか。」

青井「法規範として政府を縛る規範として政府も思ってきたし、私達も思ってきたというところにポイントがあるんだと思うんです。攻撃的な兵器を持つことができない、他国を侵略することできない、専守防衛だということだったり、武器を輸出しちゃいけないんだという風なことだったり、集団的自衛権の行使は出来ないんだということだったり、9条の取り囲む様々な政策があって初めて9条は9条だったんじゃないかと思うんですね。」

ナレ「その専守防衛について今年2月安倍総理は国会で答弁している総理は専守防衛を堅持するとしながらも。安倍「敢えて申し上げたいと、こう思う訳であります。それは相手からの第一撃を事実上で甘受し、かつ国土が戦場になりかねないものでもあります。ひとたび攻撃を受ければこれを返すことは難しく、この結果先に攻撃した方が圧倒的に有利になっているのが現実であります。」

ナレ「青井教授はこの答弁に注目している。」

青井「180度今まで考えてきた平和国家とは違うはずなんですよ。それが私たちの望むところなんだろうか。そこを考えなくちゃほんとはいけないんじゃないかと思いますね。平和国家っていう風に言ってきましたけれども、それはなんだったんだろうか。一度壊したら多分同じもの絶対作れませんので、いいんだろうかということも含めて本来は問われるべきなんだろうと。」

青井未帆氏の議論は憲法改正反対の立場に立ち意見として表明されていたのでこのシーンは全面的に「反対」として処理した。

スタジオでの論評では以下朱記したやり取りが繰り返り広げられていた。

膳場「青井教授がおっしゃっていたんですけれども、国民投票を経て憲法に書き込むことになると、自衛隊の権威というのはかなり高くなる。つまり国民に認められた機関だから特別なんだということにもなりかねないんですね。あの自衛隊は現場でも政治がグリップできずに様々な問題が起きていますから、実力組織の統制というものを楽観視しすぎなんではないかという危機感がありますよね。」

金平「あの中谷元さんがね、シビリアンコントロールと憲法改正を別だって言ってましたですけども、日報隠蔽する行為っていうのはまさに憲法を蹂躪する行為だっていうことですね、わかってらっしゃらないじゃないかという風に思いますですね。」

膳場「取材をしていて思うんですけれども、明治憲法や今の日本国憲法を作る時にはですね、市民からも様々な草案、私案が出てきているなど活発な議論があったわけですから、今行われています憲法改正の議論を見ているとね、国民全体で十分に議論が深まっているとは言えないですよ。悲願達成ですとか、自衛隊がかわいそうだからというような情緒的な話だけでは、後世に誇れない憲法改正になってしまうんじゃないかと懸念します

金平「同じく中谷さん、枕詞のようにね、安全保障の体制づくりのためには憲法改正が必要なんだったことを強調してたんですが、そうであるならば、もっときちんとですね国際情勢に目を向けなきゃいけない。例えば昨日の板門店ですね光景の意味ですよ。日本国憲法ってのが施行されたの1947年でちょうど冷戦が始まってですね、その時にも再び戦争しちゃいけないんだというような、まあ連合国側の高い理想の意図がですね今の憲法に反映されてるって言われてますけれども、今はですね昨日のように朝鮮半島の非核化というようなね冷戦時代

の遺物を早く取り除く方向に行こうっていうの流れができてる時に、自民党を目指してる改正なんていうのはね、さっきの安全保障体制づくりとかね、その冷戦時代にあった緊張状態の中に逆戻りしようとしているような、そういう印象を受けるんですね。その意味でも今の政権とは流れの国際的な流れの蚊帳の外にあるんじゃないかなっていう。憲法を変える変えないのですね主人公ってのは、あくまでもときの与党ではなくて国民であるべきだと思いますね。」

スタジオでの論評は金平氏、膳場氏いずれも憲法改正に懐疑的および反対の意見を表明していたため、いずれも「反対」として処理した。

賛否の比率の集計結果自体は反対にやや偏ってはいるものの放送法第四条の見地からは直ちに問題であると言えるものではないだろう。しかし、ポイントごとでの評価については、憲法トークライブや自民党に焦点があたったところでは賛成に偏っており、青井未帆氏インタビューでは反対に偏っていた。これらはそもそもそういう立場を明確にしている取材源であるから当然の結果である。しかし、スタジオでの論評が反対一色であったことはそれ自体としても放送法第四条一項二号の「政治的に公平であること」および同四項の「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」という点に照らし合わせると問題であるといえる。また、スタジオでの偏りが特集全体が反対にやや偏っていることに少なからぬ影響を与えていることを踏まえると、このスタジオでの論評の放送法上の問題は悪質であると言わざるを得ない。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

・【特集】南北首脳会談

金平キャスターの「南北朝鮮の両トップが手をつなぎ、徒歩で一緒に分断の象徴である軍事境界線を越えていく光景を見て、歴史とはこんな風にして劇的に動くのかと感慨を抱いた人も多いのではないのでしょうか。蚊帳の外の本にいてそう思いました。今日の特集でもお伝えいたします。」という発言にある「分断の象徴である軍事境界線」というのはやや正確性を欠いている表現である。実際には「軍事境界線」であり実際に両国が結んでいるのは休戦協定であり平和協定ではないことから、「分断」などという生易しいものではなく、「対立の象徴」と呼ぶべきものであろう。実際に特集の中でも北朝鮮についてはナレーションが「融和路線に活路を見出す一方で北朝鮮内部では資本主義的な価値観が流入することへの警戒から統制が強まっているという。」と述べていたように、「対立」は融和していく一方で朝鮮半島の分断、特に価値観の上での分断が解消されるのかという点には疑問が残るというのが実情であろうが、冒頭での金平キャスターの発言は印象操作であるとまでは言えないものの南北融和を実情以上に大きな成果であるという誤った印象を視聴者に与える恐れは否めないだろう。

・【特集】憲法改正

金平キャスターの「同じく中谷さん、枕詞のようにね、安全保障の体制づくりのためには憲法改正が必要なんだってことを強調してたんですが、そうであるならば、もったきちんとですね国際情勢に目を向けなきゃいけない。例えば昨日の板門店のもですね光景の意味ですよ。日本国憲法ってのが施行されたの1947年でちょうど冷戦が始まってですね、その時にも再び戦争しちゃいけないんだというような、まあ連合側の高い理想の意図がですね今の憲法に反映されてるって言われてますけれども、今はですね昨日のように朝鮮半島の非核化というようなね冷戦時代の遺物を早く取り除く方向に行こうっていうの流れができてる時に、自民党を目指してる改正な

んていうのはね、さっきの安全保障体制づくりとかね、その冷戦時代にあった緊張状態に中に逆戻りしようとしているような、そういう印象を受けるんですね。その意味でも今の政権とは流れの国際的な流れの蚊帳の外にあるんじゃないかなっていう。憲法を変える変えないのですね主人公ってのは、あくまでもときの与党ではなくて国民であるべきだと思いますね。」という発言であるが、これについては、前述の南北首脳会談についての所感とも重なるが、そもそも金平キャスターは南北融和の流れを現状で過大評価あるいは楽観視をしているフシが見受けられる。「朝鮮半島の非核化」にしても「冷戦時代の異物を早く取り除く方向」にしても、今は「流れができてきている」に過ぎず、今後どうなっていくのかは予断を許さない状況である。こういった状況において「安全保障の体制作り」というものは冷戦時代にあった緊張状態にも適応できるものではあるだろうが、だからといってそれ自身が冷戦時代にあった緊張状態への逆戻りというのは些か強弁が過ぎるだろう。また、「国際的な流れの蚊帳の外」というのも疑問が残る。まず朝鮮半島情勢について核・ミサイル問題のみならず不審船・漂着船や拉致問題を抱えている日本にとって必ずしも楽観視出来る状況ではない。加えて、朝鮮半島情勢が好転したとしても、国際社会というのは極東地域で完結するものではなく、他の地域について問題がまったくないとは言えない状況であることから、日本が安全保障体制を整えることは「国際的な流れの蚊帳の外」とは言えないだろう。

もつとも、それは金平氏が抱いた印象だといえればそれまでの話であるが、やはり公共の電波を使って発言しているのだから印象論だけでコメントする、印象を受けますという言葉で留保を付すというのは控えたほうが良いだろう。また、「憲法を変える変えないのですね主人公ってのは、あくまでもときの与党ではなくて国民であるべきだと思いますね。」という発言についても、「実際には国民は憲法改正を求めている」という印象を与える発言であるが、報道番組として国民が憲法改正を求めているのかどうかについて言及するのであればやはりそれなりのエビデンスを提示する必要があるだろう。少なくとも、国会の議席状況では憲法改正に肯定的な勢力が優勢である。もちろん、議席状況と国民の声が必ずしも一致するわけではないので、それだけではどちらとも言えないが、憲法改正運動は署名を集めたり各所でイベントを開催したりしているのだから、その署名や参加者の集まり具合などは最低限エビデンスとして示すべきであろう。そうでなければ印象論あるいは視聴者に特定の印象を与えることを意図しての発言であるという誹りは免れ得ないだろう。

青井氏の「まあ(解釈は)1ミリも変わらないとか位置付けるだけであるというような説明がしばしばなされますけれども、問題を小さく見せるという意味において、大きな危険をはらんでいると考えています。」「実力組織が入ると少なくともこれまでのバランスで崩れる理由ですよね。だとするとおそらく特定秘密になるであろう、その自衛隊の運用について国会がどこまで口を出せるのかとか、司法権が何ができるのかとかとか、統治全体に関わってくるような問題ってのが後から後からきつと出てくるんだらうと思います。そう考えると1ミリも変わらないっていうのは全くありえない。理論的にはもうほぼ不可能なお話。」「憲法にもう一度はその統帥というような作用を特別なものとしてですね、入れることに他なりませんから、自衛隊を書き込むということは、あの日報問題とか文民統制とかその辺りから始めなければ、本来はその統帥作用をどうコントロールするのかっていうことは語れないはず。なんとなく自衛隊頑張ってるし入れてあげた方がいいんじゃないかという話ではなくって、その実力組織ですので、これコントロールに失敗した結果が日本国憲法の前提なわけですから、本当にその力量があるのか、任せていいのか、ということも国民に問われているほかならないんじゃないでしょうか。」という発言であるが、この議論を貫徹した場合、日本は自衛隊という実力組織を持つのか持たないのか、という議論に帰着するだろう。しかし、今回は憲法改正特集ということもあってか、憲法を改正しない場合はどうなるのか、やはり自衛隊が存在する以上は運用の中で三権のバランスが崩れる危険があるのかないのか、改憲を行った場合に青井氏が起こるであろうと指摘している問題は憲法を改憲しないまま現在の運用を続けた場合は起きるのかどうか、という点について触れられていなかったのが非常に残念であった。

また膳場キャスターの「国民投票を経て憲法に書き込むことになると、自衛隊の権威というのはかなり高くなる。つまり国民に認められた機関だから特別なんだということにもなりかねないですね。あの自衛隊は現場でも政治がグリップできずに様々な問題が起きていますから、実力組織の統制というものを楽観視しすぎなんではないかという危機感がありますよね。」という発言であるが、憲法に認められた機関であれば権威が高くなる、ということについては些か疑問である。憲法上認められた機関として会計検査院がある。ここは他の行政機関である財務省や警察庁のような府省庁と同じ国家公務員総合職という試験でキャリア職員(総合職)の採用を行っているが、設置法に根拠を持つ他の府省庁とは違い憲法に根拠を持っているから受験生から人気だとか権威ある機関と見られている、という話を検証者は寡聞にして聞いたことがない。同様に、自衛隊が憲法に書き込まれたからといって権威が高くなるのかという点については疑問である。

また、金平キャスター、膳場キャスター、そして青井氏と憲法改正に反対の意見に共通していたのが「実力組織の統制」という点であるが、これについては「実力組織の統制」を出発点にだからこそ憲法上の疑義を解消し、憲法上一点の曇りのない法体系でしっかりと統制していかなければいけない、自衛隊を統制するうえで法律こそがシビリアンコントロールを支えているのだから、その法律に憲法上の疑義があるという状態は解消しなければシビリアンコントロールをよりよく実現することはできない、むしろ今のように憲法上の疑義がありながらも自衛隊が存在しているという状況のほうが危険であるがさりとて自衛隊を捨てるということとはできないといったロジックで憲法改正という結論を導出することも可能である。

このようにどちらの結論も導出できるようなポイントについてはやはり、賛成と反対の両方の意見を取り上げるべきではないだろうか。